

はじめに

直江兼統は慶長三年（一五九八）に三十八歳で米沢城（山形県米沢市）に入り、元和五年（一六一九）に五十九歳で没した。その間の業績を見ると、特に慶長六年（一六〇一）に徳川家康に降って以降は、困難を背負い、多忙を極めたものと思われる。本書の目的は、客観的に見ればさぞかし大変だったであろうこの米沢での約二十年間を、果たして直江兼統自身は主観的にはどのような思いで送ったのか、ということを考えてみようというものである。

但し、四百年も前の人間の内面へのアプローチは、史料や資料による裏付けを得ることが難しく、そのほとんどが可能性を求めての想像の域を出ない。したがって、本書を読んでも直江兼統に関する確かな情報が得られるわけではないことを、あらかじめお許し願いたい。

このような試みはむしろ小説を書くことに近いのであろうが、でき得る限りは歴史

学等における先達の研究成果から話を起こし、全くの創作に陥らないように努めた。したがって、すでに公表されている直江兼統に関する研究成果が収められた著作等と合わせてお読みいただければ、本書の内容をより理解していただけるものとも思う。

いずれにせよ、本書の試みが直江兼統という人間像に迫るための一助となれば、幸いである。

尚、文中に登場する年齢は、現代の数え方（満年齢）としている。また、文中に登場する人物の名前は、その人物の年齢に関わらず、最も広く知られた名前を用いていることをご了承願いたい。

本書は、遠藤英著『直江兼統の素顔』（二〇〇七年発行／私家版）に一部修正を加え、図版・写真を追加したものです。

表紙写真

表紙一／直江兼統肖像（福島県立博物館蔵「集古十種」より）

梵字（種子）「普賢菩薩」

表紙二・三／直江状写（部分・米沢市上杉博物館蔵）

目次

武人 / 9	
長谷堂城攻めの背景 / 10	
最上攻め / 18	
兼統の転機 / 22	
智将 / 36	
智者 / 37	
治水 / 42	
米沢の建設 / 49	
義 / 56	
上杉謙信の「義」 / 57	
上杉景勝の「義」 / 63	
直江兼統の「義」 / 68	
愛 / 71	
兜の「愛」 / 71	
仁愛 / 75	
家族愛 / 77	
かぶき者 / 81	
前田慶次 / 82	
かぶきの心 / 86	
兼統の素顔 / 89	
直江兼統関連 略年表 / 91	
米沢城主要部と街道及び河川 / 97	
現在の米沢市街に見る米沢城下 / 99	

武人

現代において私たちが何らかの目的を持って仕事をするように、戦国の世においても武将たちは何らかの目的のために戦っていた。したがって戦いは、それ自体が目的ではなく、目的をかなえるための手段であり、過程であった。但し、戦いは常に相手があることであり、互いに相手の思惑をはずすために精いっぱい努力しているのであるから、固定的なシナリオはほとんど役に立たない。むしろその場面ごと、段階ごとに何通りもの展開の可能性を予測しながら、状況を正確に読み取り、適切な判断とタイミングで行動しなければならぬ。

しかし第三者の私たちは、一戦一戦の勝ち負けを固定的なものとしてとらえ、そこだけを切り取って解説を加え、もっともらしい批評をしがちである。そして直江兼統についても、慶長五年（一六〇〇）の長谷堂城（山形県山形市）からの撤退をもって、まるでその後の人生を暗転させるほどの敗北であったかのような評価さえ登場している。

本稿では、長谷堂城の戦いの背景と目的に注目しながら、直江兼統のその後の米沢での人生に迫りたいと思う。

長谷堂城攻めの背景

長谷堂城の戦は、慶長五年（一六〇〇）に直江兼続率いる上杉軍が山形の最上義光もがみよしあきを攻めた際の一戦である。だが、その背景を理解するためには、二十年以上も時間をさかのぼったところから見ていかなければならない。

天正六年（一五七八）に上杉謙信が死去した後の上杉家は、後継者争いによる家臣団同士の戦い（御館おたての乱）によって急速に弱体化、その後も織田信長の攻勢を受けながら、支配域の縮小や家臣の反乱など、危機的状况が続いた。本能寺の変で信長が殺されたことでかろうじて危機を脱した上杉景勝（謙信の養子）は、あらためて支配体制を構築し直すために豊臣秀吉政権に接近する。その接点となったのは、直江兼続と石田三成であった。兼続と同一年で律儀な智将である三成は、兼続と意気投合し、二人は親密な関係となった。この二人を間に挟んで、秀吉と景勝が手を組んだ。

石田三成をかわいがっていた秀吉は、タイプのよく似た直江兼続をとても気に入って、自分の家臣になることを望んだりした。また景勝も信頼を得て、五大老の一人に加えられた。こう